

ハンドボール競技におけるゴールキーパー  
の評価方法に関する研究  
— サイドシュートに対するつめと位置取りについて —

佐藤大優 (小学校課程・保健体育副専攻)

{序論} 動機・目的・方法

本研究では、まずハンドボール競技におけるゴールキーパーの運動行為を明らかにするために、平成7年度東日本学生ハンドボール選手権大会(函館)における男子の試合をビデオ録画し、その中から優秀とされる大原優一選手(早稲田大学)に注目して、彼の典型的プレーを量的、質的の両面から分析した。この事例分析により優れたゴールキーピングの成り立ちを明らかにするとともにゴールキーパーの有効な評価方法を模索するものである。

{本論}

第1章 ハンドボール競技のゲーム分析とは

ハンドボールにおいて、その競技能力が最も明確に現われるのがゲームである。そのため、選手の個人競技力を診断するためにはゲーム分析が必要であるといえる。

この章では、ハンドボールのゲーム分析がどのように行われてきたかをG, Stieler, H, Döblerなどの理論に依拠して明らかにした。我が国のハンドボールにおけるゲーム分析は河村等の論文やランニングスコアに代表されるように、運動行為の結果を数量的に捉えていくものが多い。しかしそれだけでは、ゲーム分析に必要な運動行為の過程が明らかにされていないという問題点がある。

第2章 運動学からみたハンドボールのゲーム分析

Meinel, K. は運動行為を質的に明らかにするためには「印象分析」が必要であると述べている。これは目の前で行われていく運動を「直観」においてありのまま記述していく方法であるが、それにはその運動に対する優れた“眼力”を有していなければならないという前提条件がある。また、次の8つのカテゴリーが「印象分析」を行う際の拠り所となっている。

- ①運動の局面構造 ②運動のリズム ③運動の伝導 ④運動の流動  
⑤運動の弾性 ⑥運動の先取り ⑦運動の正確さ ⑧運動の調和

これらは、それぞれが独立しているものではなく、互いに有機的に絡み合っており、1つの「運動徴表」として存在している。そしてその中から特に、「運動の局面構造」「運動のリズム」「運動の先取り」を重要視して取り扱った。

第3章 ハンドボールのゲーム分析の実際

この章では、東日本インターカレッジにおける大原選手の典型的なゴールキーピングに着目し、それらを実際に数量的、質的に分析を行った。

数量的分析の結果明らかにされたことは、対順天堂大戦での66.6%、対法政大戦での61.9%という大原選手の後半の驚異的な阻止率である。これは大原選手の有能さを示すものである。

質的分析では、大原選手のゴールキーピングの典型例を4つのパターンに分類した。ビデオを用いて「印象分析」を行ない、その結果、「誤った先取り」をさせるキーピング、“待ち”のキーピングなど、“静”“動”などで表すことのできる運動学的にも合理的で優れた「運動徴表」であることが確認された。

{結論}

本研究では、数量的分析と質的分析を用いて、大原選手のプレーヤー分析を行った。その結果、ゲームにおける運動行為の構造を明らかにしたとともに、各プレーの根底には正確な「位置取り」があることが確認された。さらに、その「運動構造」を明らかにした「印象分析」は対象を「共感」に基づいて客観化できることから、意義の深さを考えさせられた。それと同様にして、「印象分析」に基づいた「他者観察」だけでなく、「自分の運動形態を対象化できる」という利点のあるインタビュー法等の「自己観察」も有益であると考えられた。

すなわち、ゲーム分析は数量的分析を用いた「印象分析」に加え、さらに「自己観察」を行っていくことが望ましいと考えられた。

主要文献

- (1) Döbler, H.、(谷釜了正訳, 1985) : 球技運動学、不味堂出版  
(2) ヒューマンスポーツ研究会(編, 1991) : HUMAN SPORT SCIENCE、中央法規出版  
(3) Meinel, K. (金子明友訳, 1981) : マイネルスポーツ運動学、大修館書店